



S H U N K E N 2 0 0 9 - 0 7 3 7 - 0 2

駿建

2009年夏期号 Vol.37 No.2 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

「NU ARCHITECTURE WEEK (NU建築週間) 2009」報告



ポスター

建築週間 WG

6月10日(木)から13日(土)まで、建築学科を挙げたイベントである「建築週間」が開催された。第2回目となる今年の共通テーマは「建築の境界」である。

このイベントは、一昨年まで毎年4回程度、延べ30回以上開催されてきた「NU 建築フォーラム」が母体となっている。「建築学科棟」となった5号館を中心に、建築学科の存在を内外にアピールする複合イベントである。

今年度行われたコンテンツの概要は、以下の通りである。

・オープンラボ

通常は所属するゼミ生しか出入りしない研究室のドアを、文字通り「オープン」にし、各研究室の活動や雰囲気気軽に触れられる機会を設ける。今回は、最終日の土曜日に開催し、2、3年生を中心に多くの学生が各研究室を訪れていた。

・NU 建築フォーラム

建築週間の中心となるコンテンツ。「建築の境界」を共通テーマにさまざまな内容のレクチャーが行われ、それぞれの会場で立ち見が出るほどの盛況であった。昨年、不測の事態で直前に中止となった藤森照信先生を、今年は無事お迎えすることができた(各レクチャーの詳細については「レポート」参照)。

・卒業設計・修士設計展

今回は、各階にある輪講室や会議室などの小さな部屋やEVホールなどに分散する展示計画を行った。ひとつの部屋に1~2作品を展示し、各作品をじっくりと見る

ことができる環境とした。すべて見終わると5号館を一巡りできるという趣向でもある。

・海外研修旅行写真展

昨年度の海外研修旅行の記録。2つのコースが、それぞれ工夫を凝らして旅行の内容と雰囲気を伝える展示を行っていた。

・エントランスドーム

昨年に引き続き、アルミシザーズドームがエントランスゲートとして5号館吹き抜けに設置された。次回は、ドームを利用したポスターの掲示など、より華やかな演出を試みたい。

今回のイベントも、各系の大学院生(とくにM1)が中心となって、さまざまな準備や当日の運営を支えてくれた。彼ら無くしては、このような企画は成立しない。本当にお疲れ様でした。ありがとう。

今年は、前回に比べて学外や高校生の参加が若干ではあるが増えてきたようである。少しずつこのイベントが認知されてきたということであろうか。次回に向けてさらに内容を練って、実のあるイベントにしていきたい。

(佐藤光彦・准教授)

NU 建築フォーラムレポート

1. 「建築と映画のインタープレイ」

講師：内野正樹(エディター, ecrimage 主宰)

モデレーター：佐藤光彦(建築学科准教授)

NU 建築フォーラムの初日は、エディターの内野正樹



オープンラボ



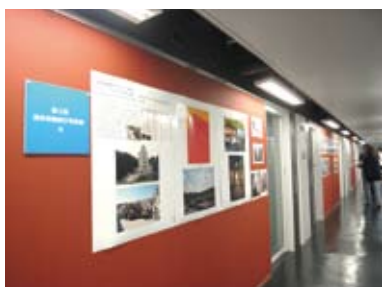
大学院生による解説



教員による体験コーナー



卒業設計・修士設計展



海外研修旅行写真展



エントランスドーム

さんをお迎えして、建築と映画についての講演が行われた。内野さんは建築専門雑誌『建築文化』や『DETAIL JAPAN』で既成の枠に縛られない企画を実現してきたことで知られているが、一方で無類の映画好きとしても知られており、自身が編集長を務めた雑誌でも話題になった映画の特集を手がけてきた。そんな氏の講演ということで、会場には映画好きの学生や教員、外部からの来場者などが多数詰めかけた。

約2時間の講演では、30以上の映画作品がキャプチャー映像で紹介された。第1部では「建築から映画への視線」をテーマに、おなじみの映画の中の意外な場面で、著名な現代建築が登場している場面が示され、それらがどのように位置づけられているかが解説された。また、SF映画に出てくる未来都市や空想都市の描写方法や、ゴダール、アントニオ・タボラ、ベルトルッチら巨匠たちの建築空間の捉え方などが示され、映画の背景や点景として用いられる建築や都市の描かれ方の違いなどが論じられた。

内野さんは、「空間の連続と断絶を作り出す」という意味で建築と映画には共通性があるという。第2部「映画から建築への視線」では、溝口健二や小津安二郎、ビクトール・エリセ、ホ・ジノなどの作品を見せながら、台詞や過剰な演出に頼らずに感応的な場面が作られている例が示された。最近の映画にはCGやSFXの進化によってさまざまな表現が可能になっている半面、「リアルさの

き違い」のような状況が広がりつつあるという。それは建築界にも通じる部分があるだろう。後半の講演からは、説明的に作られたものではなく「対象を知覚するために有用ではないものを排する」ような編集の手法が、建築にも共通する可能性が示唆されたといえる。別の機会に何回かに分けて講義してもらいたいような中身の濃い講演であった。

(山中新太郎・助教)

2. 「無印良品の家が目指すもの—暮らしのOSとしての住宅」

講師：土谷貞雄（ムジ・ネット株）

モデレーター：佐藤光彦（建築学科准教授）

講演に先立って、担当するM1の学生にアンケートを実施してもらった（対象は4年、M1の100人ほど）。その結果、驚くべきことに全員が「無印良品」の商品を購入したことがあり、ノート類に至っては96%が持っているという回答が得られた。かくいう筆者も、あらためてリストアップしてみるとかなりの種類と数の商品を所持している。これほどまでに生活に浸透している「無印良品」というブランドにはどのような秘密があるのか、そこを送り出す「家」にはどのような戦略があるのか、興味津々の学生たちが多数詰めかけた。

土谷さんは本学のOB（近江研究室黒沢ゼミ）であるが、現職に至るまでまさに波瀾万丈ともいえる経歴の持ち主



内野正樹氏



土谷貞雄氏

でもある。ここで詳細に触れるスペースはないが、ご自身からお話いただいた経歴をもとにした「ひるまずにさまざまなことにチャレンジしてほしい」というメッセージも、学生たちの刺激になったと思われる。

「無印良品」の歴史から話は始まった。30年前に「簡素簡潔」をコンセプトとして、田中一光、小池一子、杉本貴志らが中心となって事業を立ち上げた。企業の意志決定の中心にデザイナーがいるということが、「無印」を謳いながらもデザインを重視するこの会社の特徴であるとのことだ。「無印の家」はMUJI netというネット通販会社が販売している。2001年に始まったネット販売事業の中で、家を造ってほしいという声から開発が始まったそうだ。ここで初めて土谷さんは「無印の家」に関わっていくことになる。難波和彦さんや隈研吾さんがデザインに関わっていることは知られているが、実はそれほど多く売れているわけではないという。そして「家を考えることはハードのデザインではない」との思いから、その後「家」から離れ、メールマガジンを媒介としたアンケートを通して、生活の細部からあらためて現代の暮らし方を「ソフト」としてとらえ直し、デザインすることを目指しているという。ここで、かつて在籍していた黒沢研究室による「住宅の逆説」（住宅を空間論や計画論ではなく、細部の性能や仕様から考えるというアプローチ）へと話がつながる。現在はさらに、「木造アパートの再生」など、学生たちも巻き込んだ活動も展開している。土谷さんのバイタリティあふれる行動力と、「無印良品」という会社の理念の深さに圧倒された講演会であった。

(佐藤光彦・准教授)

3. 「ガリレオに学ぼう—構造設計は進歩したか?—」

講師：川口衛（構道家・法政大学名誉教授・川口衛構造設計事務所代表）

モデレーター：岡田章（建築学科教授）

「ガリレオに学ぼう—構造設計は進歩したか?—」と題して川口衛先生にご講演をいただいた。参加者は、学内外合わせて約230名。川口衛先生から約400年前の偉人ガリレオ・ガリレイの残した示唆を通して、現在の構造設計は進歩したのか？ 真に構造設計に必要なことは何か？ あらためて考えてほしいという趣旨でお話いただいた。

なぜガリレオ話か？ はじめに現在の構造設計の環境は、大容量・超高速コンピュータと設計ソフト・最適設計手法などが整備され、重要な判断ですらコンピュータが行い、構造設計者=オペレータとなってしまうような状況にある。設計者がオペレータにならない新しい学習システムが必要であると述べられた。

“世界で最も美しい10の科学実験”（日経BP社）の中に、ガリレオの実験は2つも掲載されており、その1つが「梁の強さの実験」である。ガリレオ(1564~1642)は、フックの法則や微分積分を知らない状況下で構造の本質を完全に捉えていた。ガリレオがまとめた「新科学対話」(岩波文庫)の中から、梁の強さ、石柱保管、最適形態についてご紹介いただいた。梁の強さに関する考察では、スケールの変化が及ぼす影響を骨の絵を使ってビジュアルに説明され、スケールが大きくなると自重を支持すること自体が大きな問題になる。軽くて強い材料や効率のよい構造システムが必要となり、スケール感覚がとても大事になる。また石柱保管の話では、応力(不静定構造)の不確定性：応力は計算どおりに生じない、ハンブリーのパラドックス(4脚机は、3脚机より弱い?)、石柱のむろさ：わずかな条件の変化で破壊するのは構造としては不適、ロバスト性(条件変化に対して余裕が大切)、についてご紹介いただいた。

ガリレオの話を踏まえ、モントリオールオリンピックの50mキャンティレバー、北京オリンピックの300m門型フレームなど、スケール音痴?の実際に建設された競



川口衛氏



藤森照信氏

技場を取り上げ、スケール感覚がいかに大事か、具体的に躯体重量などを数値で示して述べられた。

次に、ガリレオの次元解析の応用例として先生が手がけられた「加須市のジャンボ鯉のぼり」、長さ 100 m のジャンボジェット機より大きな鯉のぼりを大空で泳がせるための取り組みを、映像も交えながらご紹介いただいた。

まだまだ聴きたい興味深い話であったが、司会の岡田先生から 2 時間に及んだ講演の続きは次回あらためて機会を設けさせてもらう約束をしていただき、盛大な拍手で講演会は終了した。構造において大切なことは何か、ガリレオと川口先生のプロジェクトからあらためて考えさせられ、また構造の楽しさ、魅力も学生たちに伝わったのではないだろうか。(宮里直也・助教)

4. 「藤森照信の建築越境術」

講師：藤森照信（建築家・建築史家・東京大学生産技術研究所教授）

モデレーター：大川三雄（建築学科教授）

田所辰之助（短大准教授）

NU 建築週間の最終日には 2 年越しの願いがかなって藤森照信氏をお迎えすることができた。『明治の東京計画』や『建築探偵団』など建築史家として知られた氏は、45 歳のときに「神長官守矢資料館」で建築家としてデビューした。設計をするようになって「歴史家としていろいろな種類の建築を客観的に見てきたものが、設計を始めたとたんに関心が偏っていった」という。

そんな藤森氏の好きな建築として、冒頭にポルトガル北部にある石の家とマリにある泥のモスク、日本の投入堂（三徳山三仏寺）の 3 つが紹介された。それぞれ建築と周囲の環境が一体化していることや、周囲の自然を浮き立たせる力があることなどが理由だという。これらが建築家・藤森照信の作品解説の伏線となった。

実作については、まず自然素材を使うさまざまな試み

が紹介された。古代の製材法にならって作った「神長官守矢資料館」のテーブル天板や、焼杉を使った「焼杉ハウス」など、近代以前からある職人の技法を再現しながら、自然素材をあるがままに建築へ導入していることが特徴であった。次に植物を建築に取り込む建築として、屋根にニラが植えられている「ニラハウス」や、なまこ壁を草と瓦で作って外壁とした「ツバキ城」、芝棟のある「ねむの木こども美術館どんぐり」などが紹介された。建築と自然を一体化させるのではなく、「体から産毛が生えるように建築から植物を生えさせる」ことを意図したという。最後に茶室が紹介されたが、氏の茶室の多くは冒頭で紹介された投入堂のように、床が地面から切り離され、明るく外部を見渡すことができる窓がある。しかも、畳や障子は一切ない。既成の茶室から軽々と離陸した藤森流の作法を見ることができた。

講演を通して印象に残ったのは、氏の「ことば」に対するスタンスである。「歴史家は見て感動しただけでは負け。それを言語化できれば勝ち」という一方で、「ことばはものに光を当てるようなこと。作られつつある建築にことばをあてようとすると、発酵中のものに光を当てるように、できかけているものをだめにしてしまう。建築家は意味のあることばを発しない方が良い」という。

建築史家・藤森照信はことばを介して歴史上のさまざまな事象を結びつけ、人々を惹きつけるいくつもの物語を紡いできた。一方で、建築家・藤森照信はさまざまな素材や自然との関わりを通して、新しい建築のポキャラリー（言語）の可能性を拓いてきた。しかし、それらをあえて批評的な語り口で説明したり、歴史の中に位置づけたりすることはしない。この、ことばに対するスタンスの違いこそ、2 つの顔をもつ藤森氏の真骨頂なのだろう。エネルギーに建築を作り、建築を語り続ける藤森氏の活躍からこれからも目を離すことができない。

(山中新太郎・助教)



満員の 901 講堂



懇親会の藤森氏と学生たち

平成20年度 建築学科就職状況

建築学科就職事務室

概況

就職担当として多くの企業の方々の訪問をうけたことから、平成20年度は、前年度に引き続いて上向きの状況を期待しておりました。しかし、ふたを開けてみると、内定者は、前年の91.3%に対し、86.4%という結果に止まってしまいました。平成19年度の就職状況の報告には「10年前から続いた就職氷河期がようやく終わったことを実感し、過去の卒業生、とくに女子学生が、優秀でありながらも職にありつけなかった時代が続いたことを思うと、今の学生諸君は恵まれた環境におかれた幸運に感謝すべきです」と書かれています。平成20年度も、その延長として、幸先の良いスタートを切ったはずでしたが、意外な結果となり、加えてサブプライムローン問題により、100年に一度ともいわれる不況に遭遇してしまいました。今後、当分の間、厳しい状況が続くものと思われます。そうした中でも、嬉しいことに女子の就職率が学部、大学院ともに男子

を上回り、優秀な女子学生が着実に社会に進出している様子を伺わせませす。おそらく女子学生の方が自分の将来像に対し、高い意識をもっている人が多いことが、こうした結果となっているに違いありません。

求人企業の状況

求人数は、日大本部の「NUナビ」に一元化されたため、建設分野での数は不明ですが、平成20年度は例年通りの水準を保っていたように思います。熱心に求人に来られる企業に対し、学生側の反応が鈍いことも例年通りで、専門分野での優良企業に関しては、先生方から学生に対するもっと熱心なアドバイスの必要性があるように感じました。企業の方が求人のために来校された場合、就職担当としてお会いし、希望を伺った上で、その結果を、就職事務担当の矢萩さんを通じて先生方のメールにお送りしていますが、先生方からの反応は今ひとつで、卒業研究の学生さんに情報が伝わっていないこと

も多かったように感じています。就職活動の基本は、学生本人の強い意志と決意だと思えます。そのためには、学生個人がNUナビを通じて情報を得ることが主流となっていますが、学生さんにとっては建築教室や先生方をも交えた雰囲気づくりが必要なのかもしれません。

就職内定者の内訳

産業分類別の内訳をみると、例年、上位を占める建設、住宅、不動産がいずれも昨年よりも下がり、代わっ

表-2 月別求人件数

	平成20年度	平成19年度
10月	4	4
11月	11	12
12月	52	24
1月	50	31
2月	21	35
3月	14	17
4月	6	15
5月	11	12
6月	6	9
7月	3	12
8月	0	3
9月	0	0
10月	0	0
11月	0	0
12月	0	0
1月	0	0
2月	0	0
3月	0	0
合計	178	174

表-1 就職状況の概要

注：()内は女子内数

	平成20年度			平成19年度		
	学部	大学院		学部	大学院	
		建築	不動産		建築	不動産
就職希望者数	214(63)	51(10)	12(1)	220(81)	57(14)	6(2)
就職内定者数	186(56)	43(9)	12(1)	202(75)	51(13)	5(2)
大学院進学者数(留学希望・その他含)	99(27)	5(1)	1	85(23)	5(1)	0
就職・進学者数	285(83)	48(10)	13	287(98)	56(14)	5
求人会社数	178			174		

て、設備や設計事務所関係、官公庁・法人が上がっています。この傾向はしばらく続く気配をみせています。設備関係は、例年、多くの募集があるにもかかわらず、応募者が少ないのが特徴ですが、専門性を生かすことのできる職種として、今後に期待したいと思います。不況時に強い

は何といっても官公庁・法人です。おそらく今後は激戦区となる可能性が高くなると思いますが、積極的に挑戦してもらいたいです。

学部3年生と大学院1年生を対象に、9月から就職指導が始まります。卒業生による企業紹介なども行われます。就職活動が本格化するの

は、学生諸君のモチベーションを高める必要性から毎年行っているものです。積極的に参加すること、自分自身の希望や将来像を明確にしておくことが、就職活動の第一歩だと思

（平成20年度就職担当：大川三雄、事務担当：矢萩有美子）

表-3 求人・内定者の内訳

	求人会社数				内定者数								内定者数割合
	大企業	中企業	小企業	計	大企業		中企業		小企業		計		
					学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
A 建設業	47	13	4	64	33(10)	11	4	2	3		40(10)	13(0)	15.9%
B 住宅・不動産	9	6		15	45(10)		16(4)		5(3)		66(17)	0(0)	19.8%
C 設備	11	4		15	4	1(1)	3(1)		1(1)		8(2)	1(1)	2.7%
D 設計事務所・インテリア	8	11	8	27	13(7)	5	16(5)	8(2)	9(4)	5(2)	38(16)	18(4)	16.8%
E 建材・エンジニアリング	12	9		21	9(4)	1	1	1(1)	1(1)		11(5)	2(1)	3.9%
F コンピュータ・情報	12	2		14		1(1)		1			0(0)	2(1)	0.6%
G 製造業・営繕・その他	9	1		10	10(3)	1	4(1)		1		15(4)	1(0)	4.8%
小計	108	46	12	166	114(34)	20(2)	44(11)	12(3)	20(9)	5(2)	178(54)	37(7)	64.6%
H 官公庁・大学 法人				9 3							7(2)	6(2)	3.9% 0.3%
I 進学 (大学院・研究生・留学・その他)											99(27)	5(1)	31.2%
J 自営業											0(0)	0(0)	0.0%
総計				178							285(83)	48(10)	100.0%
											333(93)		

以上の統計は学部、大学院建築学専攻に関するものである。

注：大企業…従業員500名以上、中企業…従業員100名以上、小企業…99名以下、()内は女子内数、求人会社数…再募集は除く。

表-4A 就職先の内訳〈建設〉

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院			学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部
鹿島建設							3(1)	1	3(1)	1	長谷工コーポレーション							3(1)	0	
竹中工務店				1			2(1)	1	2(1)	1	奥村組							1	1	
清水建設			1(1)				2	1(1)	2	1	ピーエス三菱							1	0	
大成建設							7(3)	7(3)	0	0	木内建設							1	0	
大林組		1	1(1)			1	2(1)	1	1	1	野村建設工業							1	0	
戸田建設	2	2		1			2	3	3	3	住友不動産リフォーム							1	0	
前田建設工業							1	0	1	1	小川建設							1	0	
西松建設	1					1(1)	2(1)	0	0	0	平成建設							1	0	
フジタ							2	2	0	0	合田工務店							1	0	
間組							1	1	0	0	Doosan 建設							1	0	
東急建設							1	1	0	0	第一工業							1	0	
熊谷組							2(1)	2(1)	0	0	トーヨー建設							1	0	
安藤建設							2	1	2	1	横内工業							1	0	
総計											3	3	2(2)	2	0	0	35(8)	8	40(10)	13

表-4B 就職先の内訳 (住宅・不動産)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
積水ハウス							4		4	0	アーネストワン								1		1	0
大和ハウス工業							4(2)		4(2)	0	日本住宅流通								1		1	0
三井ホーム							2		2	0	コスモスライフ								1		1	0
住友林業							3(1)		3(1)	0	三菱リアルエステートサービス								1		1	0
パナホーム							1(1)		1(1)	0	ザイマックスビルマネジメント								1		1	0
ポラスグループ							4		4	0	明和地所								1		1	0
東京セキスイハイム							4(1)		4(1)	0	ゴールドクレスト								2		2	0
トヨタホーム							1		1	0	サンフロンティア不動産								2		2	0
トヨタホーム千葉							1		1	0	セントラル総合開発								1(1)		1(1)	0
タマホーム							1(1)		1(1)	0	パナホーム北関東								1		1	0
住友林業ホームテック							1(1)		1(1)	0	多摩中央ミサワホーム								1		1	0
アキュラホーム							1		1	0	茨城セキスイハイム								2(1)		2(1)	0
三井不動産販売							2(2)		2(2)	0	湘南ミサワホーム								1		1	0
野村不動産アーバンネット							2		2	0	穴吹ミサワホーム								1(1)		1(1)	0
大京							1		1	0	新潟中央ホーム								1		1	0
鹿島建物総合管理							1		1	0	セキスイハイム九州								1(1)		1(1)	0
興和不動産							1(1)		1(1)	0	石友ホーム								1		1	0
トステム住宅研究所	1								1	0	I.S.HOME 松盛堂								1		1	0
ジェイアール・日本ビルテック							1		1	0	シエルト								1		1	0
長谷工コミュニティ							1		1	0	トーエイ不動産鑑定								1(1)		1(1)	0
大和リビング							1		1	0	TOC								1(1)		1(1)	0
大京リアルド							2		2	0	トミオ								1(1)		1(1)	0
大京アステージ							1		1	0												
総計											1	0	0	0	0	0	0	65(17)	0	66(17)	0	

表-4C 就職先の内訳 (設備)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
高砂熱学工業							3		3	0	日本設備工業								1		1	0
新日本空調							1(1)		0	1(1)	菱和設備								1		1	0
太平エンジニアリング							1		1	0	SONA								1(1)		1(1)	0
日立空調販売関東							1(1)		1(1)	0												
総計											0	0	0	0	0	0	0	8(2)	1(1)	8(2)	1(1)	

表-4D 就職先の内訳 (設計事務所・インテリア・コンサルタント)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	
日建設計							1		0	1	博展								1		1	0
三菱地所設計							2		0	2	日展								1		1	0
久米設計							1		0	1	フジヤ								1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
佐藤総合計画							1		0	1	光建舎								2(1)		2(1)	0
山下設計							1(1)		0	1(1)	イクスアーク都市設計								1		0	1
NTTファシリティーズ							2		2	0	共同建築設計事務所								1(1)		0	1(1)
構造計画プラスワン				1					0	1	芦原太郎建築事務所								1(1)		0	1(1)
スペース							1		0	1	久慈建築設計事務所								1(1)		1(1)	0
日立建設設計							2		0	2	平岡建築構造研究所								1		1	0
東畑建築事務所							2		0	2	石川設計								1(1)		1(1)	0
INA新建築研究所							1		1	0	青研構造事務所			1					1(1)		1(1)	0
ナガサキデザイン研究所								1	0	1	日本テクニード								1(1)		1(1)	0
構造計画研究所							2(2)		2(2)	0	T.O.N.E								1		1	0
類設計室							1		1	0	アイテック								1(1)		1(1)	0
横河建築設計事務所				1					0	1	ポリテックエイティディ								1		1	0
乃村工芸社							2		2	0	ムラヤマ								2(1)		2(1)	0
丹青社							1		1	0	ジーク								2(1)		2(1)	0
大塚家具							2(2)		2(2)	0	ピーディーシステム				1(1)				1(1)		1(1)	0
池下設計							2(1)		2(1)	0	東京ソイルリサーチ								1		1	0
NECファシリティーズ							1		1	0	ヴェアウォール・コンテック								1		1	0
ソニーファシリティーズ							1(1)		1(1)	0	セラック・ホールディングス								1		1	0
オフィス設計							1(1)		1(1)	0	ラックランド								1		1	0
総計											0	0	2(1)	2	0	0	36(15)	16(4)	38(16)	18(4)		

表-4E 就職先の内訳 (建材・エンジニアリング)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
YKK ap							2(1)		2(1)	0	三協フロンティア									1		1	0
日立機材								1(1)	0	1(1)	ナカ工業									1(1)		1(1)	0
三和シャッター工業									1(1)	0	エーアンドエマテリアル									1		1	0
ナイス									1	0	アベルコ									1(1)		1(1)	0
大建工業									1	0	山宗化学			1								1	0
JFEエンジニアリング								1	0	1	栗原									1(1)		1(1)	0
総計											0	0	1	0	0	0	10(5)	2(1)	11(5)	2(1)			

表-4F 就職先の内訳 (コンピュータ・情報)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
エヌティティシステム開発								1(1)	0	1(1)	構造ソフト				1							0	1
総計											0	0	0	1	0	0	0	1(1)	0	2(1)			

表-4G 就職先の内訳 (製造業・営繕・その他)

注：(株)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計											
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院										
岡村製作所							2		2	0	横浜銀行									1		1	0								
東日本旅客鉄道							3(1)		3(1)	0	中南信用金庫									1		1	0								
全日本空輸								1	0	1	東江運輸									1		1	0								
西武鉄道							1(1)		1(1)	0	三洋エナジートワイセル									1		1	0								
丸井グループ							1(1)		1(1)	0	エール									1(1)		1(1)	0								
東日本高速道路							1		1	0	チトセアート									1		1	0								
関電工							1		1	0	総計											0	0	0	0	0	0	15(4)	1	15(4)	1

表-4H 就職先の内訳 (官公庁・法人)

注：(助)は省略 ()内は女子内数

会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計		会社名	教室推薦		研究室推薦		縁故推薦		自由応募		計											
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院										
愛知県庁							1(1)	0	1(1)	松戸市役所										1	0	1									
渋谷区役所								1	0	1	平塚市役所									1(1)		1(1)	0								
世田谷区役所									1	0	1	御殿場市役所								1		1	0								
北区役所							1		1	0	三島市役所									1		1	0								
さいたま市役所							1(1)		1(1)	0	日本大学理工学研究所研究員				2(1)							0	2(1)								
千葉市役所							1		1	0	JA セレサ川崎									1		1	0								
川口市役所							1		1	0	総計											0	0	0	2(1)	0	0	8(2)	4(1)	8(2)	6(2)

表-4I 就職先の内訳 (進学)

注：()内は女子内数

	学部		大学院		計			学部		大学院		計			
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院		
日本大学大学院	70	21	1		71	21	千葉大学大学院	1				1			
東京大学大学院	1				1		北陸工業専門学校	1				1			
慶応義塾大学大学院	3				3		留学希望	3(1)	1(1)			4(2)			
東京工業大学大学院	1(1)				1(1)		その他	18(4)	3			21(4)			
横浜国立大学大学院	1				1		総計						99(27)	5(1)	104(28)

表-5 企業内定の応募方法

	学部	大学院	計	比率
教室推薦	4	3	7	3.3
研究室推薦	5	5	10	4.7
縁故推薦	0	0	0	0.0
自由応募	169	29	198	92.1
総計	178	37	215	100.0

注：官公庁、法人、大学院進学、自営業を除く。

2009年 関西研修旅行報告



聴竹居

建築史・建築論研究室では毎年2月に関西研修旅行を開催しております。

関西研修旅行は実際に建築を見て体験することが大きな目的です。短期間で集中的に古代から近代の建築や、一般公開されていない建築を見学し、その場で先生方の解説、質問を通じて理解を深められることがこの旅行の魅力です。

日程：2009年2月20日（金）～2月24日（火）

参加者：学生22名 引率教員4名

見学先：

2月20日（金）

東大寺（南大門、大仏殿、鐘楼、大湯屋、二月堂、法華堂）、新薬師寺、十輪院

2月21日（土）

明日香村（飛鳥資料館、飛鳥寺）、法隆寺（中門、金堂、五重塔、夢殿、伝法堂、etc.）、慈光院

2月22日（日）

聴竹居、大山崎山荘美術館、新風館、京都府京都文化博物館、無名舎、紫織庵

2月23日（月）

清水寺（馬駐修理現場、鐘楼、西門、本堂、奥院）、金地院、無鄰庵、佳水園

2月24日（火）

綿業会館、甲子園会館、旧山邑邸

今回の旅行は奈良県の飛鳥寺、飛鳥資料館を盛り込み、古代の文化から近代の住宅まで、建築を通してその時代背景をより深く感じることでできるコースでした。

通常見ることのできない修理現場の見学では、一つの建築における歴史というものを体感することができました。

また、他研究室の先生方やOBの方にも多数ご参加いただき、さまざまな視点からのお話を聞くことができました。他にも、町屋では住んでいる方から生活味あふれる話を聞く機会もありました。建築に対するさまざまな見方や捉え方を学ぶことができたのも、この旅行の醍醐味ではないでしょうか。

（幹事：荒井一樹、有川慎一郎、勝原基貴、河合晴香、佐藤央、島田佳織、土屋沙希(M2)・建築史・建築論研究室）

古建築から近代建築まで

長島早枝子（3年）

今回の研修旅行で最も良かったことは、時代も用途も異なるさまざまな建築を見られたことです。5日間でこんなに多くの建築を見られる機会はそうないでしょう。

旅行前半の奈良の古建築は、建築史の授業で習ってはいましたが、まだまだ知らないことと分からないことだらけの状態だったので不安でした。しかし、先生方の説明を聞き、図面とあわせて実物を見て、建築のどこを見ればいいのか徐々に分かるようになりました。基本的な部材の名称から様式の違い、時代背景、建築のプロポーシオンまでとても丁寧に説明していただきました。先生方だけでなく大学院生からも話を聞け、気軽に質問できました。

京都に入ってから、寺院、お茶室、伝統的な町屋、古い建物を壊さず利用していくリノベーションされた近代建築など、見学する建物の幅が広がりました。

私の中で最も印象的だった建築は「聴竹居」です。藤井厚二さんの設計で建てられた実験住宅で、日本の夏の暑さを凌ぐことを第一に考えられています。畳間の床下から冷気を入れ、天井の窓から排気したり、基礎のコンクリートに通風用の穴が開いていたり、風通しをよくする工夫がいくつもみられました。現在のさまざまな環境問題を思うと、このような環境共生住宅の考え方は見習うべきところがたくさんあると感じました。ここでも、歴史研の先生の説明が非常に分かりやすく、個人で行った場合には気づかないような部分がありました。

最終日の大阪、神戸では大正、昭和の近代建築を見られました。とくに日本に現存するフランク・ロイド・ライトの設計した建築の一つ、旧山邑邸が見られたことが嬉しかったです。ライトの建築の特徴を実際に見られ、空間のおもしろさを体感できました。

短期間で時代の異なる多くの建築に触れることができ、とても勉強になりました。また勉強以外にも、先生や先輩方との懇親会などもあり、普段接点のない人たちともいろいろお話ができました。

3年に上がる前の春休みに、楽しく充実した時間を過ごせ、参加して良かったと思います。



無名舎



清水寺馬駐修理現場



甲子園會館

関西研修旅行を終えて

今野和仁（4年）

今回の研修では、奈良の東大寺から始まり、京都の町屋などを見学し、神戸にいたるまで、さまざまな年代の建築を巡ったが、そのどれもが異なる時代背景、土地のコンテクスト、固有の形式をもち、新鮮であった。

旅の一番の参加理由には暎竹居の存在があった。これは藤井厚二によって1927年につくられた自邸である。実験的環境住宅としてのコンセプトも興味深かったが、意匠的な面も気になっていた。ここでは、モダンなセンスで数奇屋建築が実践されていて、サンルーム側の外観は和風に見えるが、窓まわりの木部のラインが強く、軒が短いせいか、どこか壁が主役のモダン建築のようにも感じた。この研修の半年前に、海外研修でコルビュジエ建築を見て、面の美学に触れていたからかもしれない。一方、内部においては、それを裏切るような数奇屋的な空間が広がり、藤井厚二独特の線の美学があった。また、内部空間の分節や個々の表現も、幾何学的な枠や線によってコントロールされているのが、古くもあり新しくもあるような印象だった。

京都では歴史的な町屋を訪れた。敷地内に二つの庭を設け、日当たりによる温度差から生まれるかすかな風を取り入れていた。暑い夏に対する理にかなった環境のつくり方に驚くと同時に、都会暮らしに慣れきった身体には、ここの空間はきびしいなというのが実感だった。実際、町屋での暮らしは、東京での環境に対する意識、価値観とはあまりに開きがあると思う。だからこそ、都会の生活空間と自然環境をいかに接近させようかというテーマが、変わらず今日的であると感じた。

旅行の最後には村野藤吾設計の佳水園に宿泊することができた。普段、学生では泊まれないであろう高級な場所に泊まることができたのに感動したし、すべての客室において細部のデザインが異なっていた点に驚いた。

これまで、様式、装飾、歴史といえば、学生にとっては知ってはいるつもりでもどこか表層的な部分で終わってしまい敬遠しがちなテーマであったが、今回の研修で日本人がかつて考えてきたことや深層の部分にも多少触

れることができ、興味をもつことができたように思う。

見る触れる体感する研修旅行

福永 藍（M1）

関西旅行には、建築を自分の観点で、疑問や発見を見出しながら見ようという気持ちで、初日より臨みました。全体を通して感じたのは、建築家の技法の巧妙さと日本人のもつ感覚の素晴らしさです。今回の研修は、寺院や茶室、庭園といった伝統的な建造物を中心とした日本独自の文化が現れた建築が印象的でした。とくに良い経験となったのは町屋の内部を見られたことでした。『無名舎』や『紫織庵』では、生活スタイルや季節に対応すべく、日本人の繊細な感覚による技法が凝縮された空間が、敷居の内に広がっていました。繊細な感覚といえば『慈光院』を初めとする茶室建築です。茶室にはそれぞれ、施主や設計者の思想や性格が反映された細やかな手法が凝らされ、さまざまな表情をもっていました。「和み」や「わび」「さび」だけではない感覚、精神が高められたような気がしました。ただ、茶室の「基本」について無知であったため、「基本くすし」がどこにあるかが理解できなかったことは自身の課題として残りました。

前述のような日本の伝統的な建築に触れてから見るフランク・ロイド・ライトを初めとする近代建築家の作品は、重厚でダイナミックな表現を感じました。しかし、例えば、『綿業会館』の空調の吹き出し口を、装飾の一部としてカモフラージュするといった工夫にも、設計者の繊細で華麗な技法が光っていました。また、『旧甲子園ホテル』の採光の取り入れ方や『旧山邑邸』における視線を利用した演出には、空間の見せ（魅せ）方に唸らされる部分が多くありました。寺院建築では柱割による立面・空間の操作に感心し、茶室では日本人のもつ感覚を引き出されて心地よさを感じ、近代建築ではダイナミックさの裏にある繊細さを見出しました。個人の旅行では見られない数多くの貴重な建築を自分の目で実際に見て勉強になりました。

来年は幹事として建築を見て触れて学ぶ旅行を企画したいと思います。

建築はおもしろい

— AND展って何？

斎藤公男

筆者略歴

1938年
1963年

群馬県生まれ
日本大学大学院工学研究科
建築学専攻修士課程修了
(坪井善勝研究室)

1991～2007年 日本大学理工学部建築学科教授
2007～09年 日本建築学会会長
2008年 日本大学名誉教授



皆さんは「日本建築学会 (Architectural Institute of Japan: AIJ)」をご存知でしょうか。創立は1886 (明治29)年、初代会長代理は東京駅の設計などで有名な辰野金吾です。現在の会員数は約3万5千人ですが、他の学・協会と異なり、研究者・教育者・技術者・建築家・行政・学生といった多くの職能やさまざまな分野にわたる人々によって構成されています。「会員相互の協力によって建築に関する学術・技術・芸術の進歩をはかる」。これがAIJの目標 (定款) です。

私は学部生の頃、AIJの学生 (準) 会員になりました。当時は有楽町の、現在は田町駅前にある建築会館の図書館を利用するためです。以来、50年の長きにわたって、AIJは常に身近な存在でした。やがて教育・研究・設計活動を通じてAIJとの関わりは段々と深まっていき、多くの人々との交流を通じ、建築の魅力と社会的役割が一層理解されるようになってきました。そして一昨年、AIJの50代会長に推挙され、2年間という短い期間ですが、今年5月末をもって無事、任期を終えることができました。ご支援、ご協力くださった多くの方々、とくに本学の校友、教員の皆さんには心よりお礼申し上げます次第です。

さて、私は会長就任のとき、1つの言葉を掲げました。それは「『建築』への責任と誇り一進む建築、導く社会」です。そして具体的な戦略として、「建築学とデザイン (力) の融合」の旗印をあげました。

そこでまず、社会貢献に対する実体的な活動として次の2つの特別調査委員会を立ち上げました。すなわち、

- ①「建築学からみたあるべき構造設計」
- ②「現存建築を活かす対震改修デザイン」

とくに①は2005年秋におきた姉歯事件 (耐震強度偽装問題) を風化させず、AIJとしてやるべき自助努力を行うべきという課題です。さらに、見える形のイベントとして次のような2つの企画を提出しました。

- ③ AIJ大会「建築デザイン発表会」(2008. 広島大会より)
- ④「アーキニリング・デザイン (AND) 展 2008」

この内③は大会における新しい発表の場の創立です。従来の学術論文の発表に加え、建築の計画・設計・生産に関する構想や成果としての“デザイン”の自由な発表・

講評の場を設けることにより、建築学における新しい議論と交流が生まれることが期待されています。昨年の会場は大変な盛り上がりで、論文数も過去最大 (6,551編) となりました。

④の企画は「建築」に対する“誇り” (魅力と役割) を建築界の人々と市民とで共有したいという理念から思いついたものです。“アーキニリング・デザイン”とはエンジニアリング・デザインとアーキテクチャーを統合した造語ですが、一般解 (普遍性) と特殊解 (個別性)、あるいは建築デザインとテクノロジーの融合・進化といったものをイメージしています。展覧会のタイトルを「模型で楽しむ、世界の建築」としたように、主役は全国の研究室などで制作した手づくりの模型です。市民や子供たち、学生や専門家も興味をもっていただき、10日間で6千人をこえる入場者がありました。

模型の数は130余り。特筆すべきはその内の約半数が日本大学理工学部の学生諸君の作品ということ。大学1年生から大学院生までが集まり、取り組んだその創意と工夫は驚くばかりです。世界遺産から現代建築まで、古今東西のすぐれた名作・今日の話題作。住宅・ドーム・橋梁・超高層・集いの空間・都市などの空間デザイン。それらのしくみとひみつを計画・材料・構造・工法・環境といったソフトからハードにわたる視点から解き明かそうとしたものです。おそらく、こうしたフラットで時空をこえた展覧会は前例がないでしょう。

AND展2009は「全国巡回展」です。九州から北海道まで全10会場を巡りながら、その地域のコンテンツも参加しますから、“祭りの御輿”のように「建築」の輪が広がっていきます。仙台での学会大会時 (8.26～29) の会場はメディアテーク。そして最後の凱旋 (お疲れ様) 展の会場は東京駅前の丸ビル内の大アトリウム「マル・キューブ」(2010.2.26～3.7) です。はたしてどんな展示空間が生まれるのか、今から楽しみですが、新しい模型も参加させたいと思っています。この夏休み中、君もこの世紀のイベントに参加してみませんか。きっと「私にとっての建築」の世界がスタートできるはずです。

(さいとうまさお・日本大学名誉教授)

建築に生かされて

早川 眞

建築との出会いは小学校高学年の頃で、自宅でアトリエを構えていた父の図面を引く姿を見ながら育った。

小学生の頃、住宅現場に連れていってもらったり、たまに測量ポールや巻尺を使った敷地測量の手伝い、日光写真の青焼きの手伝いなどの記憶がある。なかでも強烈な印象は、父親は毎日徹夜の連続だったような気がしてならない。そこで子ども心に、大変な父親を本格的に手伝いたい、助けたいとの気持ちが強くなったことが建築を志すきっかけである。ただ、この時は企画段階のコンセプト作りの大変さを理解していなかった。父からも建築を志す際の心構えなどはなにも教わらなかった。このことが、自分自身の建築哲学をもつことを大変遅らせた。大学に入学してから、慌てて内外の有名建築家の図書を読んでも、わざと分かりづらく書いているのではと思うくらい難解な文章にいらだち、おさまりの、建築に向いているのかどうかの悩みに襲われる。

結局分かりやすい話し方、人格的にもまともに思えた先生（環境工学）の分野に入ることになる。今もコース選択に、このように気分的な要素で動く学生が少なくないのでは？ その意味で教員側の責任も重大である。

建築の良いところは、専門領域とはいえず芸術から理工学まで大変幅広く、建築を学ぼうと志した人は自分にマッチした分野と遭遇できることにある。

最初は現場での活躍を意識していたが、当時実家が設計事務所ということで、どのゼネコンを受けても書類ではねられた。親に無理を言って大学院に進学する。

大学院で初めて学生生活の雰囲気味わう。研究に対する興味もわいてきた。そして、研究所志望でめでたくゼネコンに入ることができた。

設計部や現場で困ったことの相談を受け、その解決で知恵を働かせたり、実験をすることがおもしろかった。緊張感があり、解決すると施主や関係者から感謝の言葉をいただく。このときに自分の存在感を確認でき、仕事のおもしろさを感じた。推理小説以上におもしろい。だが、大学などの基礎研究と違って、実用上の精度（accuracy for practice）があればスピードとコストが重要で、それだけで満足されることが多い。これの繰り返しだと、

筆者略歴

1943年 山口県生まれ
1968年 東京工業大学修士課程修了
1968～2001年 鹿島技術研究所
2001～09年 日本大学理工学部建築学科教授



点の実績のみに終わるので、JOBごとにちょっと多めの実験やシミュレーションを行って、知識を線にするように努めた。もちろん、周囲を説得したり、そのような試みを歓迎する社風であったので恵まれていた。

入社して20年、それまでの一連の仕事を学位論文にまとめることができた。もちろん、残業から帰宅して、12時頃から3時頃まで執筆に取り組む日々が半年くらいは続いた。その頑張りの原動力は何だったのか？ 研究所の先輩たちから受け継いだ伝統の行動だったのであろう。今も後輩たちは現業で得たノウハウをまとめ、次々と学位取得者が続いている。

企業での30年余りを経過して、日本大学に迎えてもらう機会を得て、当時建設不況で仲間を本店や現場に次々と配転させた身にとって、とてもありがたかった。その時々を全力投球していると、いつか道が開けるものだと実感した。大学もサービス業である。今までの施主や次工程（設計や施工部門）に替わって、お客様は学生になった。とくに、学部の学生にどうやって環境工学や設備のおもしろさを分かってもらおうかと苦心した。設備Ⅲでは、学生の自宅の設備系統図や資源・エネルギーの消費状態のレポートを作成してもらった。何人かからはレポート作成がためになったとのメモが記載され、安心した。

この4月に大学を退任したが、非常勤講師以外にも有償、無償の仕事が少なからず飛び込んできて毎日慌ただしく過ごしている。他人の役に立てることは本当に楽しい。これも建築を選んだお陰と、感謝している。

（はやかわしん・非常勤講師）

秋田スカイドームの融雪・滑雪のための温風送風設備多機能鋼管アーチ。このような事例はその後聞かない。間欠運転方法で、省エネ、安全、確実な除雪作業を可能にした。設備設計、構造設計の仲間と考案した。



建築の新たなフィールドとしての ウォーターフロント

横内憲久

建築学科の助手時代、4年生の設計製図の課題を求めて、地下鉄千代田線を各駅に北上した。おもしろいまちづくりのフィールドがないか、とにかく歩きまわり、隅田川沿いにたどり着いたのを記憶している。水が生活の風景にあるまちで暮らすのもいいものだな、と漠然と思った。その思いは、当時の隅田川一帯が工場や倉庫などに占められ、川自体も汚れ、その現実の風景の裏返しからきた感慨である。その結果、定かでないが、雑然とした現状から、川の風景を活かしたまちづくりのあり方を課題にしたように思う。

これがその後40年近く付き合うことになる都市のウォーターフロント（陸域と水域が一体となった空間）との出会いである。いまでこそ、水域の風景や環境を活かした建築やまちづくりは違和感なく受け入れられているが、そのころの東京のウォーターフロントはまず一般の人々は近づけない場所であった。いまでこそスーパー堤防（高規格堤防）事業によって、まちなかからあまり抵抗なく、川沿いのプラムナードに出られるが、当時は度重なる洪水などによって護岸（防潮堤）はかさ上げされ、切り立った直立堤防となり、橋の上以外からは川面を見ることができなかった。また、水面が見えたとしても、水は汚れ、工場からの塵灰などと相まって悪臭を放ち、さらに近づく意欲を萎えさせた。

それでも、海外の建築雑誌を開くと、建築と河川・海が一体となったまちづくりに溢れていた。海外のウォーターフロント開発を集めて紹介したのが、雑誌『都市住宅』（鹿島出版会）の1975年7月号“特集ウォーターフロント”である。わが国で現在のウォーターフロントの空間概念をイメージして、ウォーターフロントという言葉を用いたのはこれが初めてではなからうか。

それ以来、専門を都市計画からウォーターフロント計画に絞り込み、論文・著書、実施計画などにエネルギーを注いだ。最初に実施計画に関わったのは、1989年に供用開始した釧路港にある釧路フィッシャーマンズワーフMOO（ムー）である。地元釧路市出身の建築家・毛綱毅曠氏のユニークなデザインで知られるこの商業建築は、隣接する全国初の屋根付き港湾緑地（egg エッグ）とと

筆者略歴

1947年 東京都生まれ
1972年 日本大学大学院理工学研究科建築学
専攻修士課程修了（市川研究室）
日本大学理工学部建築学科助手
1982年 同 海洋建築工学科助教授
1992年 同 海洋建築工学科教授
2009年 同 建築学科教授



もに大いに賑わった。続いて1992年鹿児島県指宿市摺ヶ浜地区（温泉街）の護岸計画（設計・地域計画研究所）、1997年に大阪南港のコスモスクエアの運河および景観計画などが実施され、2006年にはついに海（運河）の上に建物が出現することとなった。

東京都品川区・天王洲（天王洲運河）にできた、浮体式水上レストラン“WATERLINE”（設計・植木莞爾／建築主・寺田倉庫）は、港湾地域（水域部分）にできた、第三セクターなどではない、純民間企業の商業施設である。25m×10mという小さな建物であるが、物流関連機能・施設以外には使用できなかった港湾地域に商業施設が立地する画期的なものといえる。許可を出した港湾管理者である東京都の英断は賞賛に値するが、これまでにない建物だけに、現行法をクリアするには時間を要した。ここでは詳細は省くが、都市計画法（運河空間）、港湾法（水面占有許可）、船舶安全法（浮体基盤）、建築基準法（レストラン部）などの各法律は、浮体式レストランなど想定していないので、許認可等を得るのに3年かかった。

しかしながら、この事例は単に海に浮いている建築物ができたというだけでなく、これまで建築の対象外であった水域が、新たな建築のフィールドに組み込まれたという意義を有していると考えたい。

都市計画法の臨港地区だけでも全国で約53,000haもある。港湾区域はその数倍の広さを有しているのである。すべての水域で建築が可能であるわけもないが、都市のウォーターフロント・水域を建築の新たなフィールドと捉える本格的な検討が求められる時代が来たと感じずにはいられない毎日である。（よこうちのりひさ・教授）



『都市住宅』1975.7月号
「特集ウォーターフロント」の表紙



浮体式水上レストラン“WATERLINE”
（東京都品川区・天王洲）

平成21年度 短期大学部建設学科 オリエンテーション報告

星 和磨



図面と見比べながら



国立歴史民族博物館にて

建築を学ぶとは何か。非常に難しい問いであるとともに解は人それぞれでしょう。芸術と工学の融合領域である建築学には、われわれを魅了する多くの専門分野があります。また、学んだ知識を活かして形として結実することは、建築に携わる魅力の一つです。建築に足を踏み入れたばかりの学生に、建築を学ぶ楽しさを知る道しるべとなるよう、本年度も授業科目オリエンテーションと建築見学オリエンテーションを実施しました。

授業科目オリエンテーション

“建設学科でいったい何を学ぶの？”私も入学当初、期待と不安が入り交じった感覚がありました。その不安を小さくし、期待を大きく膨らますべく、授業科目オリエンテーションを4月20日に実施しました。

はじめに、いわゆる一般教養科目の他に、専門科目をスムーズに履修することができるように設置されているベーシック系科目群について説明しました。次に構造材料系科目群について、力の釣り合いを考えることが力学系すべての科目の原点であること、さらに釣り合いが取れないことの意味をタコマ橋の事例などを交えて説明しました。次に計画匠系科目群について、過去の設計製図や卒業制作などの作品写真を交えながら説明しました。最後に環境系科目群について、空間を作ることによって生じる、空間内外の温熱・光・音環境などに関わる学問であることを説明しました。

いろいろな話を聞いて頭いっぱいになってしまったかもしれません。しかし、その中に「なんかあれおもしろそう」と思える分野があったと思います。初めころは「習う」科目が多いかもしれませんが、大学の神髄は「学ぶ」場であり、新しい知を生み出す場であることです。在学中にぜひ、自発的に「学ぶ」楽しさを感じてください。

建築見学オリエンテーション

一番の教材は町中に。キャンパスを飛び出し、建築をみる楽しさを知ってもらうことを目的として、建築見学オリエンテーションを実施しました。ただし、ただ行くだけではつまらない。各自が“マイガイドブック”を作

成し、見学するポイントを定めて参加しました。

ゴールデンウィークも終わり、新緑も色濃くなってきた5月14日、連日続いた雨模様が嘘のように晴れ渡り、絶好の見学日和となりました。当日の朝、船橋校舎に集合し、バス2台で房総方面へ。まずは、歴史的景観形成地区、伝統的建造物群保存地区がある佐原の町並みを見学しました。香取街道と小野川を中心に広がる佐原の町には、木造や蔵造り、洋風建築、大正・昭和初期の商店建築など、さまざまな建築が並んでおり、他の歴史的景観形成地区とは少々趣が異なるなと感じました。多くの建築の中で同行した教員たちの目にとまったのは、路地裏にある与倉屋大土蔵でした。おもしろい建築を前に議論する教員を見た学生から“建築オタク？”との声がどこからか。そんな屈託なく建築に夢中になる姿をみることもオリエンテーションの醍醐味です。

次のお目当ては佐倉市庁舎（1971）。黒川紀章の若きころの作品で、中銀カプセルタワービルと同様メタボリズムの考えが色濃く反映されています。両サイドのコアタワーの間にボイドスラブのボックスが積み重なったこの建物は言うなれば70年代のポップ。庁舎の横にあるシェル構造の議事堂も必見です。皆熱心に見学するなか、配られた図面に対し、質問をする学生の姿が印象的でした。

再びバスに乗り込み、最後の目的地、国立歴史民族博物館へ。展示物が非常に多いため、今回は各自の興味があるところを見学するに留まりましたが、一日丸々使ってじっくり見学したいものです。少々残念だったのは企画展示“日本建築は特異なのか—東アジアの宮殿・寺院・住宅—2009年6月30日～8月30日”。少し時期が早く見学することができませんでしたが、この号がお手元に届くころにはちょうど開催中だと思います。時間をたっぷり作ってぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

大学は自分が学びたい、知りたいと思うことに最大限応える機関です。しかし、学ぶ場は大学だけではありません。本オリエンテーションをきっかけに、机に向かって与えられた問題を解くだけでなく、いろいろなことに興味をもち、自ら調べ、体得する楽しさを大学生活の中で身につけてください。（ほしかずま・助手）

新任非常勤講師紹介

建築学科

加藤未佳 先生

(環境工学Ⅲ, 建築環境実験)

略歴

- 2004年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程修了(環境・情報研究室)
- 2004年 日本大学理工学部建築学科副手
- 2009年～ 関西大学先端科学技術推進機構



Louis I.Kahn は “Without light there is no architecture.” という言葉を残している。光の取り入れ方を探求した彼こそその言葉ではあるが、光と影のコントロールで空間の印象が変わることは、建築空間を計画する立場の者なら、誰もが実感するだろう。照明技術の発達した今日では、以前にも増して光は当たり前のように存在し、意識に上らないかもしれないが、今も昔も建築空間の印象を決定づける重要な要素の一つであることには違いない。環境工学はこのような光が導く印象を論理的に解明し、新たな空間を提案し、未来へつないでいく学問である。授業を通じてこの奥深さと興味深さの一端を伝えられればと考えている。(かとうみか)

大学院建築学専攻

佐倉 勇 先生

(建築設備計画演習)

略歴

- 1968年 芝浦工業大学建築学科卒業
- 1971年 京都大学大学院修士課程修了
- 1971年～ 鹿島建設(株)建築設計本部
- 2008年～ (株)アルモ設計 (鹿島グループ)



入社時、私は、「既に確立された技術を学んで仕事をするだけで、あまり面白味のない毎日」と想像しました。しかし、最初の仕事で、解決すべき問題がたくさんあることが分かりました。以来今日まで、新しい課題が次々に生まれて、やりがいのある仕事に就けたことを幸せに思っています。しかしながら、人類史上最大ともいえる「地球温暖化」ほど、重大な課題はありませんでした。大きな活躍の舞台が皆さんの前に用意されています。その時のために、大いに学んでください。(さくらいさむ)

建築学科

澁井和夫 先生

(不動産経営)

略歴

- 1973年 慶應義塾大学経済学部卒業
- 1973～2000年 三井信託銀行(現中央三井信託銀行) 入行 不動産開発部長 兼不動産鑑定部長
- 2004年 (社)日本不動産鑑定協会主任研究員
- 2007年 世田谷信用金庫参与
- 2008年～ 同金庫理事



現在は、世田谷信用金庫常勤理事(企画・リスク本部長兼総合企画室長)、(社)日本不動産鑑定協会常務理事(非常勤)情報安全活用委員会委員長、不動産鑑定士実務復習審査会委員、(財)不動産流通近代センター「不動産コンサルティング技能試験・登録事業」試験委員などをしていきます。「かんぼの宿」問題では「不動産売却等に関する第三者検討委員会」委員(日本郵政株式会社委嘱)として報告書作成にタッチしました。

血液型A型。やぎ座の第Iデーク。六白金星。動物占い・オオカミ。好きな野球チーム・カープ。好きな酒・御前酒9。好きな女優・高橋恵子。好きな歌手・岩崎宏美。

(しぶいかずお)

大学院建築学専攻

千田 光 先生

(建築構造設計演習)



斜めエンドプレート工法
の実験



略歴

1980年 東京大学工学部建築学科卒業
 1980年～ 住友金属工業
 1990年 SOMシカゴ事務所派遣
 1995年 東京工業大学大学院博士課程修了

私は鉄鋼メーカーの建築構造技術者として、鋼構造建築の新工法開発から設計、施工管理まで幅広い仕事に携わってきました。「鉄は産業の米」という言葉は古臭いけれど、まだまだ健在です。建築は極めて広い分野から物を集めて統合する業界であり、逆に鉄鋼は極めて広い分野に物を供給する業界です。ただ、建築の世界も鉄の世界も、深くて広いことに関しては同じであり、その接点である建築鋼構造は非常におもしろくてやりがいのある分野だと思います。鉄を使っていかに建築の可能性を引き出していくかという課題にチャレンジしませんか。

(せんだひかる)

建築学科

染谷正弘 先生

(建築設計マネージメント特論)



田中先生の家
(1986年・処女作)



略歴

1979年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻
博士前期課程修了(近江研究室)
 1979～83年 黒沢隆研究室
 1985～2008年 (株)デザインショップ・アーキテツク代表取締役
 2008年～ (株)DSA住環境研究室代表取締役

夢と現実の狭間で、人はいつもゆれ動いています。夢を抱き、現実を見る。そして、夢と現実を止揚する強い意思を常にもち続けること、それが何よりも大切です。建築を夢みて、建築の現実を知り、建築を創る、その楽しみを学生の皆さんに実感してもらいたいと思っています。

僕が初めて理工学部の非常勤講師をさせていただいたのは今から17年前。それから短大も合わせて約11年間、毎週日大キャンパスに通わせていただきました。再び、今年度から大学院で非常勤講師をさせていただきます。よろしくをお願いします。

(そめやまさひろ)

建築学科

高橋真奈美 先生

(建築設計Ⅲ, 設計演習Ⅰ)



港北の家



略歴

1982年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
 1984年 同大学大学院修士課程修了
 1984年～96年 スタジオ建築計画
 1996年～ プラネットワークス設立(杉千春と共同)

時間と空間のある中で、建築は動かないものです。でも、建築が創り出す空間で、ひとは動き何かを生み出し、時には楽しく感じたり幸せな気持ちになったりします。一方で建築の建つ環境は時とともに変化し、それを受け止めながら、とても素敵な建築になることもあります。建築を創るのには時間もかかり、気力も体力も必要です。でも、できたとときの楽しさは言葉に言い表せないような感動があります。身近なものをキチンと観察し、他のひとの意見に耳を傾け、自分の考えを信じて、頑張って建築を創りましょう!

(たかはしなみ)

建築学科, 大学院建築学専攻

竹内申一 先生

(建築設計Ⅳ, 設計演習Ⅱ, 建築設計演習特論)



Ravel



略歴

1990年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
 1992年 同大学大学院修了
 1993～2004年 伊東豊雄建築設計事務所
 2005年 竹内申一建築設計事務所設立

ここ数年、いくつかの大学で非常勤講師をしています。が、学生の自由な視点やリアリティから生み出された独自の提案を見たときはとてもうれしくなります。何かを提案するとき、それを最終的に支えてくれるのは、客観的なデータや知識ではなく、個人の切実な欲求だと思います。経験やリアリティに基づいた欲求であれば、個人の枠を超えて共有可能になっていくものです。あたらしい建築や空間は、こうした欲求なくしては生まれません。雑誌や専門書を見ているだけではなく、皆さんが生きている中で感じる「疑問」や「怒り」あるいは「快樂」、そんなものをバネにして我々が驚くような提案を見せてください。

(たけうちしんいち)

大学院建築学専攻

中島 肇 先生

(建築構造設計演習)



グリーンドーム前橋



略歴

1981年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1983年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了(斎藤公男研究室)
 1983年～ 清水建設(株)
 2000～04年 日本大学理工学部建築学科非常勤講師

実務に近い構造設計図書(設計図, 計算書)をまとめる構造設計演習は, 建築学科としては初めての試みとのことです。構造設計は H18 年の建築基準法改正により確認・検査の厳格化などが図られ, 社会から注目されています。

安全性の確保が前提ですが, 一方で美しい建築や質の高い空間を創造することも私たちの大切な仕事です。重力や自然(地震, 台風, 雪など)を相手に設計をまとめていくことは, 理論や技術の基本と応用が必要ですが, 時には勇気と決断, あるいは真摯さ, 謙虚さが必要です。構造設計者には豊かな感受性と想像する心が大切だと考えています。皆さんと一緒に考えていけたらと思います。(なかじまはじめ)

建築学科

福山博之 先生

(建築設計 I)



A-house



略歴

1988年 明治大学工学部建築学科卒業
 1988～98年 磯崎新アトリエ
 1998年 福山建築事務所設立

実物同様, 図面や模型で表現された概念もやはり建築です。ザハ・ハディドの建築が建ち始めたのはここ 10 年くらいのことですが, それ以前の約 10 年の間, 彼女は, ドローイングだけで世界的な建築家の地位を築いていました。それまででない建築の可能性がその表現にあふれていたからです。建築の可能性についての思考は, 過去と現在に対する批評的な眼差しにより導かれます。そしてその可能性について考え, 表現することは皆さんの建築家としてのキャリアがスタートしていることを意味するとともに, 僕にとっても相変わらず重要なことです。(ふくやまひろゆき)

建築学科

船木幸子 先生

(建築設計IV, 設計演習III)



インスタレーション



略歴

1989年 千葉大学工学部建築工学科卒業
 1991年 東北大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
 1991年 妹島和世建築設計事務所
 1998年 フナキサチコケンテックセッケイジムシヨ設立

学生時代, 出来の良い方ではなかった私からすれば, 良くできている方, 真面目に取り組む方が大変多く見受けられ, 楽しく過ごさせていただいています。就職して, 自分たちが正しいと信じる回答を出すために, 数十あるいは百を越す案を考えては捨てる, ということに身を付け, 今もそれはそのままです。皆さんの設計に対して私が気にすることは, 建築的なテーマは何か? と, 話と計画とが合っているかどうか? という事です。でもそれよりも先に, 生き生きとした提案が出されることを期待しています。よろしくお願ひします。(ふなきさちこ)

建築学科

和美廣喜 先生

(建築生産実験)



パークシティ新川崎
(わが国初の高強度コンクリート)



略歴

1968年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1970年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了(松井嘉孝研究室)
 1970～2003年 鹿島建設技術研究所
 2003年～ 島根大学総合理工学部教授

自己の得意とする領域のみにおいて誠実に社会に貢献する。自己の実力を知り, どのような場面においてもその実力を最大限に発揮するよう努力し, 向上心をもって行動することによって自己の存在価値が認められるものである。これが, 私のこれまでの人生で学んだことである。これから学生の皆さんと接する時間は僅かしか残されていないけれど, 多様な人格をもった皆さんと議論できることを楽しみにしている。(わみひろき)

短大建設学科

高橋昌宏 先生

(ベーシック建築デザイン, 建築デザインI)



villaO



略歴

1995年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1995～2005年 一級建築士事務所アルテ・ワン
 2005年 一級建築士事務所エムズ・アーキテック
 設立

今、1年生を担当していますが、戸惑っている学生を見て、まずは“建築”というカテゴリーの中に、自分なりの“夢”とか“可能性”を見出してほしいと思っています。そして、型にはまるのではなく、好奇心をもって視野を広げて個性を伸ばしてほしい。それこそが建築をつくるということ、つまりさまざまな条件を総合的にまとめていく力を、はぐくむことになると思います。

建築をつくることの社会的意義、社会的役割をつたえ、学生と社会とのパイプ役になることが“非常勤”である私の役目ではないかと思っています。

(たかはしまさひろ)

短大建設学科

福西浩之 先生

(ベーシック建築デザイン, 建築デザインI)



ながしま遊館



略歴

1990年 日本大学理工学部建築学科卒業
 1992年 日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士
 前期課程修了(若色研究室)
 1992年～ (株)日本設計

二十数年前に船橋校舎で初めて授業を受けたころを思い出します。まだ「建築」の奥深さが分からず、与えられた課題をこなしていただけ。殻を破るのに時間がかかった気がします。突破するきっかけは、何でも良いのです。建築の雑誌や本を見たり、気になる建築作品を探して見学してみたり。スケッチやトレースをするのもいいでしょう。興味が出てくれば、深く掘り下げたくなり、求知心が大きくなるものです。みんなには、「建築」と真剣に向き合うきっかけを探してほしいと思います。その瞬間に立ち会えることができることを期待しています。

(ふくにしひろゆき)

短大建設学科

三上功生 先生

(障害者支援論)

略歴

2000年 日本大学大学院理工学研究科建築学
 専攻博士前期課程修了(吉田研究室)
 2000～03年 (株)総合設備計画
 2006年 日本大学大学院理工学研究科医療・福祉工学専攻博士後期課程
 単位取得退学(青木研究室)
 2006～07年 日本大学理工学部建築学科副手
 2007年～ 東京理科大学理工学部建築学科助教



本年度より「障害者支援論」を担当することになりました。専門分野は建築設備・建築環境工学ですが、もう少し具体的に紹介すると、体温調節機能に障害をもつ(汗をかけないなど)脊髄損傷者の温熱環境について研究を行っています。工学、医学、生理学、被服衛生学などの視点から踏み込んだ研究で、皆さんが普段の講義・演習の中ではほとんど聞くことがない内容ですので、興味がある方は気軽に声を掛けてください。わが国では少子高齢化が進んでいますが、高齢者や障害者が抱えているさまざまな問題を身近なものとして、関心をもってください。

(みかみこうせい)

■星和磨短大助手は、「楕円フリー工解析による帯域制限室形状の生成と内部に生じる音場の関係」と題した、室内音場予測のための室形状解析に関する一連の研究によって、新進の研究・技術者に贈られる「日本音響学会 第26回粟屋潔学術奨励賞」を受賞した。

■夏目将平君（今村研 M1）の「浮島美術館は泳ぐ～建物を泳がせるという手法による日本の港空間の再生～」が、「第18回 JIA 東京都学生卒業設計コンクール 金賞」（主催：日本建築家協会関東甲信越支部）を受賞した。都内各大学の卒業設計上位者のみが出品できるコンクールであり、桜建賞を受賞した同作品



建築週間での展示



平面図



浮島美術館は泳ぐ～建物を泳がせるという手法による日本の港空間の再生～

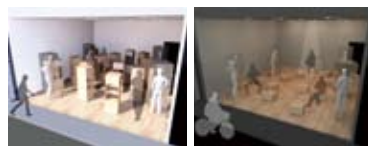
教室ぶろむな一ど

が、55点の応募から最優秀賞に選ばれた。入賞した9作品は、11月開催予定の「全国学生卒業設計コンクール」に出品される。

■栗山大君（宇杉研'09年卒業）の卒業論文「谷戸からみる道と生活圏の変化に関する研究 多摩田園都市、港北ニュータウンの土地区画整理事業を通して」が、「第5回都市住宅学会東北・関東支部学生論文コンテスト 卒業論文部門最優秀

賞」を受賞した。

■大西健太君（本杉研 M2）の「PopUp!」が、「WORLD SPACE CREATORS AWARDS 2009 学生部門優秀賞」（主催：ワールド）を受賞した。「モノ」と「人」との出逢いの場としての新しいショップスタイルへの提案が求められた。



PopUp!

■柳田佳伸君（半貫研 D3）、半貫敏夫教授、秋山宏東大名誉教授連名の原著論文「露出型柱脚を有する低層剛接骨組の地震時挙動」が、日本建築学会構造系論文集 No.639（2009年5月号）に掲載された。

■佐藤泰春君（半貫研 M2）と半貫敏夫教授は、「第6回極地設営シンポジウム」（主催：国立極地研究所）で、「建物形状による雪の吹きだまり制御を目的とした実験的研究」と題する論文を発表した。

駿建目次

2009年7月号 Vol.37 No.2 通巻154号

表紙「建築週間エントランスドーム」
設計・施工：空間構造デザイン研究室
撮影：岩崎陽子

「NU ARCHITECTURE WEEK
(NU 建築週間) 2009」報告 2
平成20年度 建築学科就職状況 6
2009年 関西研修旅行報告 10
私と建築 12

平成21年度 短期大学部建設学科
オリエンテーション報告 15
新任非常勤講師紹介 16
教室ぶろむな一ど 20